口差点

大本営を守る武器

72年前の12月8日、国民は突如、真珠湾奇襲攻撃による開戦を知らされました。3年後、松代大本営を守るための武器や弾薬を貯蔵する地下壕が中野市の十三崖に掘られました。戦争絵本『ピアニストの兵隊さん』の舞台となる平岡国民学校が陸軍作業本部と兵舎になりました。碁盤目状に張り巡らされた全長1・8キロの地下壕に武器弾薬が運び込まれ、入りきれず対岸の松林に野積みにされたほどでした。

この絵本を読まれた96歳のH先生の手紙です。「戦争の末期、私は陸軍歩兵伍長として米軍の本土上陸候補地の海岸で、爆雷を身につけ、自爆攻撃すべき立場でした。そのころ、召集されてくる兵隊には銃も武器もありませんでした。しかし、この絵本で、大本営は大量の武器弾薬を地下壕に埋蔵、前線の兵は見殺しにされていたのか、今更のように怒りが込み上げてきました」

それほどの武器がどこにあったのでしょう。秘密裏に満州（現在の中国東北部）からは運ばれていたのです。そして敗戦となり、進駐軍が武器撤去にやってきました。校庭に山と積まれた武器は重油をかけて燃やされ、湯田中のある旅館の主人は橋の上から千曲川へ武器を捨てるのを目撃したそうです。しかし、ほとんどは、H先生や丸腰の兵隊たちが死守した千葉県銚子沖あたりに捨てられたといいます。

満州から十三崖地下壕へ、そして最後は海の藻くずとなった武器は、最前線兵士のためでも、満州開拓団を守るためでもなかったのです。始めから終わりまで、軍事機密、国民を利用した秘密の結果でした。「日本をとり戻し国をまもる」。威勢よい掛け声ですが、国民を守ることと同じにはなれないと思うのです。

（松本市波田、古畑博子、65歳）

市民タイムス　2013.12.8